慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ語のmachen, lassenと英語のmake, letによる惹気的表現の比較考察
Sub Title	Zum Gebrauch der deutschen Verbalgefüge ,,machen+a.c.i." und ,,lassen+a.c.i." verglichen mit den englischen "make+a.c.i." und "let+a.c.i."
Author	中島, 耕太郎(Nakajima, Kotaro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1985
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.47, (1985. 12) ,p.116- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00470001-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ語の machen, lassen と英語の make, let による惹起的表現の比較考察

Zum Gebrauch der deutschen Verbalgefüge "machen+a.c.i." und "lassen+a.c.i." verglichen mit den englischen "make+a.c.i." und "let+a.c.i."

中島　耕太郎

0. はじめに

現代ドイツ語において "machen+akkusativ+infinitiv" (以下 machen+a.c.i. と略記する) の惹起的表現がどのような可能性と存在意義を持っているかについては，同じくドイツ語の惹起的表現の用法 "lassen+akkusativ+infinitiv" (以下 lassen+a.c.i. と略記する) と比較考察することによって以前発表した論文[1]においてある程度明らかにされた。

さて本稿の目的とするところは，先の論文の成果をふまえた上で，言語史的には同系統の英語の惹起的表現 "make+object+infinitive" (以下 make+a.c.i. と略記する)，"let+object+infinitive" (以下 let+a.c.i. と略記する) をドイツ語の惹起的表現 "machen+a.c.i." および "lassen+a.c.i." と現代語のレベルで比較対照し，それぞれの用法が意味論の観点からするとどのような守備範囲を持っており，英語とドイツ語における差異はどの点にあるのかを探ることにある。

1. "make+a.c.i." と "machen+a.c.i." の比較

意味論の観点からみると英語の動詞結合 "make+a.c.i." は次の二つの

タイプに分類される。

A) subject forces or induces object to do (something)

B) subject causes object to do (something)

以下の例文は上の A) のタイプに属する。

1) A man may take a horse to the water, but he cannot make it *drink*.
(馬を水のところまで連れて行くことはできるかもしれぬが，馬に無理矢理水を飲ませることはできない)

2) The confusion made me deliberlately *change* my mind.
(頭が混乱したので私はわざと考え方をかえた)

3) The teacher made him *leave* the room.
(先生は彼を部屋から出した)

4) I will make him *do* it whether he wants to or not.
(彼が望もうが望むまいがそれをやらせるつもりだ)

5) The policeman made him *confess* a crime.
(警官は彼に罪を白状させた)

6) The chairman makes the audience *listen* to him.
(議長は聴衆の耳を自分に傾けさせる)

7) His father made him *become* a baseballplayer.
(彼の父親は彼を野球選手にならせた)

8) I made the visitor *wait*.
(私は訪問客を待たせた)

B のタイプに属するのは以下の例文である。[9)′～16)′ は machen+a.c.i. を用いたドイツ語の訳文である]

9) It makes me *yawn*.

9)′ Das macht mich *gähnen*.
(そいつはあくびがでる)

10) His present made her *smile*.

10)′ Sein Geschenk machte sie *lächeln*.
(彼のプレゼントを見て彼女は微笑んだ)

11) You make me *forget* my misfortune.

11)′ Du machst mich mein Unglück *vergessen.*
(あなたのお話を聞いていると身の不幸を忘れます)

12) My friend made me *laugh.*

12)′ Mein Freund machte mich *lachen.*
(友が私を笑わせた)

13) The book makes me *weep.*

13)′ Das Buch macht mich *weinen.*
(その本を読んでいると泣けてくる)

14) The cold wind makes me *shiver.*

14)′ Der kalte Wind macht mich *frösteln.*
(冷たい風で思わずブルッときてしまう)

15) The thought made me *shudder.*

15)′ Der Gedanke machte mich *schaudern.*
(考えただけでぞっとした)

16) It makes me *believe* that you are right.

16)′ Das macht mich *glauben,* daß du recht hast.
(それを聞いていると君が正しく思えてくる)

17) Heat makes a gas *expand.*
(熱は気体を膨張させる)

18) Some people say that if you step on a worm it makes it *rain.*
(虫を踏みつけると雨が降るというよ)

19) The sweat on his forehead caught the light and made his black skin *shine.*
(額の汗が光をうけ黒い肌が光った)

20) It makes me *feel* quite love sick.
(それで私はとても恋に悩むのです)

21) I couldn't make anybody *hear.*
(ノックしても，または呼んでも何の返事もなかった)

22) He made me *understand* the question.
(彼のおかげでその質問が理解できた)

23) What makes you *think* so?
(なんであなたはそう思うのか)

24) Your attitude makes me *feel* that . . .
(君の態度をみていると . . . という気分にさせられる)

以上のとおり "make+a.c.i." の惹起的表現の例文 1)~24) のうち "machen+a.c.i." でドイツ語に翻訳できたのは 9)~16) だけである。それでは 1)~24) の例文を 1)~8), 9)~16) そして 17)~24) の三つのグループに分け，しかる後に "machen+a.c.i." でドイツ語に翻訳された 9)~16) のグループというのはどのような特徴を持っているのかを，それぞれのグループの例文で不定詞として使われている動詞の意味特徴に注目して探ってみることにする。

ひと口に惹起的表現といっても，先程見たように，英語の "make+a.c.i." の用法の場合，大きく分けて A) と B) のタイプに分類される。

A)：主語で示されたものが目的語で示されたものに，不定詞が表わす動作または行為を強制的に(即ち目的語がその行為を行なう意志を持っているか否かにかかわらず)，あるいは半ば強制的に(即ち説得などの手段を通じて)行なわせてしまうタイプ。

B)：主語で示されたものが原因となって，結果として，目的語で示されたものが，不定詞で示される現象を惹き起こすタイプ。

先に見たように，A) のタイプ，具体的には例文 1)~8) は "machen+a.c.i." でドイツ語に翻訳できなかった。ところで 1)~8) の中で不定詞として使われている動詞は *drink* the water, *change* one's mind, *leave* the room, *do* something, *confess* a crime, *listen* to him, *become* a baseballplayer そして *wait* であるが，これらの動詞が表わす動作または行為は一様に動作主体が意志を持って遂行するものであり，このような動詞を意志的動詞[3]と呼ぶことにする。前述の小論で述べたように，意志的動詞を不定詞として用いる場合の惹起的表現はドイツ語では "machen+a.c.i." は用いられず，"lassen+a.c.i." を用いるのが普通である[4]。したがってここではまず次のように結論することができるであろう。即ち，現代ドイツ語の "machen+a.c.i." の惹起的表現には英語の "make+a.c.i." であらわされる強制的な，あるいは半強制的な意味での惹起的表現に対応

するものがないのである。

次に B) のパターン：例文 9)～16) と 17)～24) を検討してみよう。まず例文 9)～24) で不定詞として使われている動詞をみてみることにする。

9)～16)： *yawn*, *smile*, *forget* something, *laugh*, *weep*, *shiver*, *shudder*, *believe* that . . .

17)～24)： *expand*, *rain*, *shine*, *feel* something, *hear*, *understand*, *think*

それぞれの例文によって，主語が人間である場合とそうでないものとの違いがあり，かつまた目的語においてもそのような違いはあるが，上に挙げた動詞が表わす動作，行為，現象はすべてそれを遂行する主体が，本来の意味において，意志的または意識的に行なうものではない。したがってここではタイプ A) のグループにおいて使われていた一群の動詞(意志的動詞)に対して，タイプ B) のグループにおいて使われている動詞を非意志的動詞と名付けておくことにする。

さて次に B) のタイプの中でもドイツ語の "machen+a.c.i." で翻訳できた 9)～16) と翻訳できなかった 17)～24) を別々に分析してみることにする。

9)～16) と 17)～24) で不定詞として用いられている動詞のグループにはそれぞれどのような意味特徴があるのかという点に的を絞って考えてみると，9)～16) の yawn, smile, forget, laugh, weep, shiver, shudder, believe という動詞は人間の身体内部に生起するある特定の生理現象あるいは心理現象の結果としておこる非意志的な，あるいは自発的な行為，現象をあらわしていることがわかる。ドイツ語の "machen+a.c.i." の惹起的用法がまさにこのような動詞との組み合わせで用いられ，"lassen+a.c.i." はそのような動詞との組み合わせでは用いることができないということは前述の小論でも確かめられたところであった[5]。

17)～24) で用いられている動詞 expand, rain, shine, feel, hear, understand, think 等も先に述べた非意志的動詞であることには違いがないが，ここでは仮に feel, hear, understand, think という四つの動詞に限

って着目してみると 9)～16) で使われている動詞との違いが理解しやすいように思われる。この四つの動詞は，いわゆる無意志的知覚・認識の動詞 (verb of inert perception and cognition)[6] と呼ばれる動詞群に属しており，9)～16) で不定詞として用いられている動詞群が情意，情動とか生理といった，人間の内部の根源的，本能的な部分に根ざす動作や行為を表わしているのに対し，無意識的知覚・認識の動詞は知覚や認識という言葉が示しているとおり 9)～16) で用いられている動詞群とは全く次元の異なる動作や行為を表わしている。

したがって以上みてきたように B) のタイプのグループは従来 "make＋a.c.i." の用法の非強制的な表現として一括されてきているが，ドイツ語の "machen＋a.c.i." との比較対照を行なうことにより，B) のタイプをさらに二つのタイプに下位分類することがあながち無意味なことでもないと思われるのである。いやそれどころか，従来 "make＋a.c.i." の惹起的表現が単に強制的なものと非強制的なものの二つに分類されているだけであるのに対し，以上分析を試みてきた結果判ったように，不定詞として使われる動詞の意味に着目し，大きくは強制的と非強制的，さらに非強制的用法の中にも二つのタイプがあることをむしろ辞書に記述してもよいのではないかと思うのである。

ともあれ英語の "make＋a.c.i." とドイツ語の "machen＋a.c.i." は言語史的に同系統の用法でありながら，現代語のレベルではドイツ語の "machen＋a.c.i." は英語の "make＋a.c.i." の用法のごく一部しかカバーしていないことが明らかになったと思う。

2. "let＋a.c.i." と "lassen＋a.c.i." の比較

2.1 "let＋a.c.i." の分析

意味論の観点からみると，英語の動詞結合 "let＋a.c.i." の最も基本的な用法は次に示すタイプ A)，即ち許容・容認のタイプである。

A) subject allows or permits object to do (something)[7]

以下の 17)～24) までの例文はこのタイプに属する。

17) He let me do all the work alone.
(彼は私がその仕事をすべて一人でやることを許した)

18) She let him read the letter.
(彼女は彼がその手紙を読むことを許した)

19) She didn't let me speak.
(彼女は私に話すことを許してくれなかった)

20) When he played cards with his little daughter, he usually let her win.
(彼は娘とトランプをやる時には，たいてい娘に勝たせてやった)

21) Would you let your son become an actor?
(君は息子がもし役者になると言ったら許すかね)

22) I let him have it.
(私は彼にそれを持たせておいた)

23) They should let him live in peace.
(彼等は彼をそっとしておいてやるべきだ)

24) I'll let you come with me.
(私は君が一緒に来るのを許すつもりだ)

このタイプ A) という最も基本的な用法に準ずるのが次に示すタイプ B) という放任，黙認の用法であり A) と B) の用法の差はそれほど大きくない。

B) subject leaves object to do (something)

そしてこのタイプ B) に属するのは以下の 25)～29) の例文である。

25) He let his hair grow.
(彼は髪をのばしっ放しにしていた)

26) She let him sleep.
(彼女は彼を眠らせておいた)

27) The professor let the students talk.
(教授は学生達をしゃべらせておいた)

28) I will not let my children be treated in that way.
(私の子供がそのような扱いをうけるのを黙っておれない)

29) We can't let the matter rest.
(事態をそのままにしておくわけにはいかない)

さて次に示すタイプ C) が惹起ないしは使役の用法であるが，この用法は "let+a.c.i." の場合 A) や B) のタイプと較べて例文はそれ程数多くはみつからない。

C) subject causes object to do (something)

30) He let me know the truth.
(彼は私に真実を知らせてくれた)

31) He let me hear the news.
(彼は私にその情報を教えてくれた)

32) We must let every salesman do his utmost.
(我々はセールスマン一人一人に最善の努力をさせねばならない)

33) The story let him appear in a different light.
(その物語は彼をいままでとは違った像で描き出していた)

34) The shortstop let the ball roll between his feet.
(ショートがボールをトンネルしてしまった)

35) The maid let the dishes drop by mistake.
(メイドが誤って皿をおとした)

以上例文が示しているように，"let+a.c.i." の用法は，最も基本となる A)：許容，容認のタイプ，B)：放任，黙認のタイプ，C)：惹起，使役のタイプに分類される。

とはいうものの，文の意味というものは，文脈や状況と密接に結びついているものであり，文脈，状況と切り離された文の意味を一義的に決定することは困難な場合が多い。例えば例文 17) をとり出して，この文が状況によっては上に示した三つのタイプにそれぞれ解釈されうる可能性を持っていることを示してみよう。

17) He let me do all the work alone.

A)： 目的語たる「私」がすべての仕事を一人で遂行しようという意図を持っていると仮定し，主語たる「彼」がそのような意図には積極的に賛成ではないものの，結局は「私」が一人ですべて仕事を行なうことを許す場合 17) はタイプ A) と解釈される。

(彼は私がその仕事をすべて一人でやることを許した)

B)： 目的語たる「私」がすべての仕事を自分一人で行なおうという意図を持ちつつ，すでにその仕事にとりかかっていると仮定し，主語たる「彼」が本当のところはそのような意図には反対でも「私」がそうしていることを放任，黙認している場合 17) は B) のタイプと解釈される。

(彼は私にその仕事を一人でやらせておいた)

C)： 主語たる「彼」が目的語たる「私」にすべての仕事を一人で行なわせようという意図を持っていると仮定し，「私」もその意図には反対ではなく，場合によっては積極的にそうしようという意図さえ持っている場合 17) は C) のタイプと解釈できる。

(彼は私にその仕事を一人でやらせた)

以上分析を行なってきたように，"let+a.c.i." の用法では，主語，目的語共に意志を持ちうるもの(具体的には人間の場合がほとんどだが)の場合には，主語や目的語がどのような意図を持っているかによって文の意味は左右される。しかし先にも述べたように，"let+a.c.i." の基本的な用法はタイプ A)：許容，容認そしてそれに準ずるタイプ B)：放任，黙認である。両者の違いは，例文 17)～24) 及び 25)～29) で，それぞれのグループにおいて不定詞として使われている動詞 17)～24) *do* the work, *read* the letter, *speak*, *win*, *become* an actor, *have* it, *live* in peace, *come*, 25)～29) *grow*, *sleep*, *talk*, *be treated*, *rest* の動作相の違いをみてもわかるように，A) の場合には目的語が動作，行為を遂行する以前に主語から目的語に対し何らかの形で許可が出されており，B) の場合には目的語が動作，行為を遂行する以前にはっきりした主語の許可が出されていないか，既に目的語の動作，行為の遂行は始まっていて，それに対して主語は何もしないで放っておくというケースであるという点にあるのみである。そして "let+a.c.i." はこの二つの用法で使われるのがほとんどであり，タイプ C) の惹起：使役の用法で使われることはあまりない。タイプ C) で頻繁に使われるのは，せいぜい let someone know something, let someone hear something という言い回し位である[8]。したがって英語の場合では

“let+a.c.i.”を用いて惹起的表現をすることはあまりないという推測が成り立つのだが，その理由は“let+a.c.i.”にかわる惹起的表現が他にいくつも存在するということ，わけても，先にみてきたように“make +a.c.i.”の用法が惹起的表現において大きな守備範囲を持っているということが仮定として考えられるのであるが，以下の部分ではこのことを具体的に顕証していこうと思う。

2.2 “let+a.c.i.”と“lassen+a.c.i.”の比較

さて 2.1 で行なった“let+a.c.i.”の用法の整理および分析をふまえて，この用法とドイツ語の“lassen+a.c.i.”の用法を比較対照し，“let+a.c.i.”の惹起的用法がいかに狭い守備範囲しかカバーしていないかを，そしてそれに対して“lassen+a.c.i.”が現代ドイツ語において持っている惹起的用法の守備範囲がいかに広いものであるかを例文を使って明らかにしていこうと思う。この際に例文を採集したのは何冊かの独英辞典，英独辞典[9]からであり，ドイツ語の“lassen+a.c.i.”の用法がどのように英語に訳されているかを一つの拠り所とした。

ドイツ語の“lassen+a.c.i.”の用法には次の三つの用法がある[10]。

1) 許容 (zulassen) の用法

2) 放任 (belassen) の用法

3) 惹起 (veranlassen) の用法

英語の“let+a.c.i.”の用法の場合と同様 1) と 2) の用法は基本的には同種類の用法であり，その違いも英語の“let+a.c.i.”のタイプ A) と B) のそれと同じであると考えてよい。ここで示そうと思うのはドイツ語の“lassen+a.c.i.”の 3)，即ち惹起の用法が英語の“let+a.c.i.”のタイプ C) の場合とは違って，いかに数多くまた頻繁に用いられるかということである。以下，1), 2), 3) の用法の順を追ってドイツ語と英語で比較検討を行ない最終的には，“lassen+a.c.i.”と“let+a.c.i.”の惹起的表現の守備範囲の差を明らかにしてみたい。

1) 許容 (zulassen) の用法

“lassen+a.c.i.”を“let+a.c.i.”で訳してある例

36) Er ließ mich die ganze Arbeit allein machen.

36)′ He let me do all the work alone.
(彼は私にその仕事をすべて一人でやることを許した)

37) Sie ließ ihn den Brief lesen.

37)′ She let him read the letter.
(彼女は彼にその手紙を読むことを許した)

38) Sie ließ mich nicht zu Worte kommen.

38)′ She didn't let me speak.
(彼女は私にしゃべらせてくれなかった)

39) Wenn er mit seiner kleinen Tochter Karten spielte, ließ er sie meist gewinnen.

39)′ When he played cards with his little daughter, he usually let her win.
(彼は娘とトランプをする時には，たいてい娘に勝たせてやった)

40) Würdest du deinen Sohn Schauspieler werden lassen?

40)′ Would you let your son become an actor?
(君は息子が役者になるといったら許すかね)

41) Ich ließ es ihn haben.

41)′ I let him have it.
(私は彼がそれを持つことを許した)

42) Man sollte ihn in Frieden leben lassen.

42)′ They should let him live in peace.
(彼をそっとしておいてやるべきだ)

43) Ich will dich mit mir kommen lassen.

43)′ I will let you come with me.
(私は君が一緒に来るのを許すつもりだ)

"lassen+a.c.i." を "allow+to-infinitive" で訳してある例：

44) Er ließ uns kommen.

44)′ He allowed us to come.
(彼は我々が来ることを許した)

その他の例：

45) Das Repräsentantenhaus ließ das Gesetz durchgehen.

45)′ The house of representative passed the bill.
(議会はその法案を通過させた)

上に挙げた例文から推測する限り，ドイツ語の“lassen+a.c.i.”の許容の守備範囲は英語の“let+a.c.i.”のそれとほとんど異ならないと考えられる。すなわち“lassen+a.c.i.”と“let+a.c.i.”の両者の基本的な用法は，許容の用法であることが再び確認されうると言えるであろう。

2) 放任 (belassen) の用法

“lassen+a.c.i.”を“let+a.c.i.”を使って訳してある例：

46) Er ließ sich die Haare wachsen.

46)′ He let his hair grow.
(彼は髪の毛をのばしっぱなしにしていた)

47) Die Mutter ließ ihren Sohn schlafen.

47)′ The mother let her son sleep.
(母親は息子を眠らせておいた)

48) Der Professor läßt die Studenten reden.

48)′ The professor let the students talk.
(教授は学生達に話させておいた)

“lassen+a.c.i.”を leave を使って訳してある例：

49) Wir mußten alles stehen und liegen lassen.

49)′ We had to leave everything as it was.
(我々はすべてをあるがままにしておかなければならなかった)

50) Er ließ das Licht brennen.

50)′ He left the light burning on.
(彼はあかりをつけっぱなしにしておいた)

51) Jetzt laß mal den Abwasch Abwasch sein und setze dich einen Augenblick hin.

51)′ Now just leave the washing-up and sit down for a moment.
(もういいかげんに食器洗いは放っておいて，ちょっとそこへおすわり)

例文が示しているようにドイツ語の“lassen+a.c.i.”の放任の用法に対

する英訳では“let+a.c.i.”か“leave”を用いる用法しか調べた限りでは登場してこない。このことから推測すれば英語の“let+a.c.i.”は放任の用法においてもドイツ語の“lassen+a.c.i.”と，守備範囲という点に関して言えばそれ程大きくは異ならぬであろう。

さてこれまで私達は英語の“let+a.c.i.”の A)：許容の用法，B)：放任の用法とドイツ語の“lassen+a.c.i.”のそれに対応する用法を例文を使って検討してきた結果，これらの用法においては，両者の守備範囲に格別の差を認めることはできなかった。さて次に我々は本稿のテーマの最も中心課題となっているところの惹起の用法における両者の比較検討を行なう。

3) 惹起 (veranlassen) の用法

“lassen+a.c.i.”を“let+a.c.i.”で訳してある例：

52) Er läßt mich die Wahrheit wissen.

52)′ He let me know the truth.
(彼は私に真実を知らせてくれる)

53) Er läßt mich die Nachrichten hören.

53)′ He let me hear the news.
(彼は私に情報を聞かせてくれる)

“lassen+a.c.i.”を have で訳してある例：

54) Sie ließ den Arzt kommen.

54)′ She had the doctor come.
(彼女は医者を呼びにやった)

55) Ich lasse meinen Sohn Englisch lernen.

55)′ I have my son taught english.
(私は息子に英語を習わせる)

56) Ich werde Ihnen ein Exemplar durch meinen Verleger schicken lassen.

56)′ I shall have sent to you a copy by my publisher.
(私はあなたに見本を出版者を通じて送らせましょう)

“lassen+a.c.i.”を“make+a.c.i.”で訳してある例：

57) Der Dompteuer ließ den Löwen durch einen Reifen springen.

57)′ The trainer made the lion jump through a hoop.
(猛獣使いはライオンに輪を飛んでくぐらせた)

58) Ich habe ihn die ganze Summe zahlen lassen.

58)′ I made him pay the whole amount.
(私は彼に全額を払わせた)

59) Ich ließ ihn nach London gehen.

59)′ I made him go to London.
(私は彼をロンドンへ行かせた)

60) Gott läßt es regnen, läßt die Sonne scheinen.

60)′ God makes it rain, makes the sun shine.
(神は雨を降らせ，陽を照らせたまう)

"lassen+a.c.i." を get を用いて訳してある例：

61) Ich will mir das Muster von der Fabrik zuschicken lassen.

61)′ I will get the pattern sent from the manufactory.
(私は工場から見本をとりよせるつもりだ)

62) Ich ließ meinen Namen in die Liste eintragen.

62)′ I got my name entered on the list.
(私は自分の名前をリストに登場させた)

63) Wir ließen ihn reden.

63)′ We got him to speak.
(私達は彼に話させた)

"lassen+a.c.i." を order で訳してある例：

64) Er ließ den Kapitän kommen.

64)′ He ordered the captain to come.
(私はキャプテンに命じて来させた)

以上に挙げた他にも "lassen+a.c.i." の惹起の用法を英語では他の様々な用法で訳する可能性がある：

65) Er hat alle seine Kinder studieren lassen.

65)′ He sent all his children to university.
(彼は自分の子供にすべて大学教育をうけさせた)

66) Er ließ mich warten.

66)′ He kept me waiting.
(彼は私を待たせた)

67) Er läßt einen Drachen steigen.

67)′ He flies a kite.
(彼は凧を揚げた)

68) Die Kinder ließen die Boote auf dem Teich schwimmen.

68)′ The children sailed their boots on the pond.
(子供達は池の上に自分達のボートを浮かべた)

以上の例文が示すようにドイツの“lassen+a.c.i.”の惹起的用法を英語に訳した場合の英語訳は変化に富んでいる。52)′ と 53)′ すなわち let someone know something と let someone hear something の用法は例文を採集する資料として使った，英和，英独，独英のほとんどの辞典に“let+a.c.i.”の惹起的用法として収録されている表現で，これはほとんど慣用的表現として固まった表現と見做してもさしつかえがないと思われる。そうしてみると“let+a.c.i.”の惹起の用法というのは，許容，放任の用法とは違って，ドイツ語の“lassen+a.c.i.”の惹起の用法と守備範囲という点では大きな相違があることがわかるであろう。“lassen+a.c.i.”がドイツ語の惹起的表現の中でも最も生産的なものの一つであることは，既に再三指摘されているところでもあり[11]，また上の例文52)～68)もそれを裏書きしていると思われる。ところが英語の場合，先程の仮定通り，様々な惹起的表現が存在し，殊に“make+a.c.i.”の守備範囲が大きく，“let+a.c.i.”が惹起的表現において持つ守備範囲は小さく限定されているといってよい。即ちここにおいて英語の“let+a.c.i.”とドイツ語の“lassen+a.c.i.”の惹起の用法の最も大きな違いをみることができると言えるであろう。

3. むすび

さて最後にこれまで行なってきた比較対照の結果を表にしてまとめてみよう。

“make＋a.c.i.” と “machen＋a.c.i.” の惹起的用法の守備範囲の比較対照

動詞結合 ＼ 動詞のタイプ		make＋a.c.i.	machen＋a.c.i.
意志的動詞		○	×
非意志的動詞	情意，情動の動詞	○	○
	無意志的知覚・認識の動詞	○	×

“let＋a.c.i.” と “lassen＋a.c.i.” の許容・放任・惹起の三用法の比較対照

動詞結合 ＼ 用法	let＋a.c.i.	lassen＋a.c.i.	
許　容	○	○	
放　任	○	○	
惹　起	不定詞に know, hear 等の動詞を用い，ほとんど特定の表現で使われる。	○	但し情意，情動の動詞では不可。

以上の結果をまとめると，ドイツ語において最も一般的で広い守備範囲を持つ惹起的表現は “lassen＋a.c.i.” であり “machen＋a.c.i.” は “lassen＋a.c.i.” の守備範囲外にある極く僅かの部分を受け持っているにすぎない。それに対して，英語の惹起的用法で最も守備範囲が広いのは “make＋a.c.i.” であり “let＋a.c.i.” は僅かの表現を中心として用いられるのがほとんどである。言語史的に同系統にあるドイツ語の “machen＋a.c.i.”, “lassen＋a.c.i.” と英語の “make＋a.c.i.”, “let＋a.c.i.” は惹起の用法に関していえば，現代語のレベルでは，それぞれの言語内で相補関係をなしているといえるであろう。

註

1) 中島耕太郎：「現代ドイツ語における“machen＋akkusativ＋infinitiv”形式の動詞結合による惹起的表現の可能性と存在意義」――慶應義塾大学独文学研究室「研究年報」創刊号 1984, S. 74～98.

2) 本稿における“make＋a.c.i.”および“let＋a.c.i.”の用法の意味上の分類は The dicticnary of English word Grammar on Verbs: Kenkyusha Tokyo 1981 pp. 856-863, pp. 907-923 に従っている。

3) 意志的動詞と後に出てくる非意志的動詞の区別は，動作主体の行なう動作や行為が selfcontrollable か否かによるものである。またこのような区別は Gunnar Bech が volitiv という用語を用いて行なっている。また意志的動詞，非意志的動詞という訳語については板山眞由美氏の論文に登場してくる「意志的」(volitiv) と「非意志的」(nicht-volitiv) という訳語を参考にさせていただいた。

   Gunnar Bech: Das semantische System der deutschen Modalverba. In-Travaux du cercle linguistique de Copenhague. Vol. IX 1949

   板山眞由美：Modalverb „müssen“ をめぐる一考察――その多義性の構造――，大阪市立大学セミナリウム 1983 S. 1～26

4) 小論：(1) に挙げた論文 S. 83～92

5) 同上

6) 大修館英語学辞典 Tokyo 1983 p. 506

7) 2) に挙げた辞典 p. 858

8) let someone know something, let someone hear something という表現は例文収集に使ったほとんどの英和辞典，独英・英独辞典に let の惹起的用法の例として挙げてある。

   資料収集に使用した英和辞典は以下のとおりである。

   Shogakukan Randomhouse English-Japanese Dictionary Tokyo: 1974

   Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary: Tokyo 1960

   Kenkyusha's New Collegiate English-Japanese Dictionary 1971

   Shogakukan Progressive English-Japanese Dictionary, Tokyo 1980

   Iwanami's New English-Japanese Dictionary, Tokyo 1981

   Obunsha's Comprehensive English-Japanese Dictionary 1975

   Sanseido The Global English-Japanese Dictionary Tokyo 1983

   Sanseido's College Crown English-Japanese Dictionary Tokyo 1967

9) 以下に使用した独英・英独辞典を挙げる。

   H. T. Betteridge: Cassell's *German-English, English-German Dictionary*. London/New York 1978.

   H. F. Eggerling: *A Dictionary of Modern German Prose Usage*. Oxford,

1961.

T. Jones: *Harrap's Standard German and English Dictionary*. Part I: German-English 4 vols 既刊 vols 1-3 (A-R) London 1963-74.

H. Mensinger: Langenscheidt's *New College German-English* Berlin 1973.

H. Mensinger: *Langenscheidt's Handwörterbuch English*. Teil II: Deutsch-English. Berlin 1965.

H. Mensinger: *Langenscheidt's Großwörterbuch der englischen und deutschen Sprache* „Der kleine Muret-Sanders" Deutsch-English, Berlin 1982.

H. Motekat./J. Bourke: *Brockhaus-Bildwörterbuch Deutsch-English*, Wiesbaden 1960.

O. Springer: *Langenscheidt's enzyklopädisches Wörterbuch der englischen und deutschen Sprache*. Begr. von E. Muret und D. Sanders. Teil II Deutsch: English, 2 Bde Berlin 1974-75.

Wildhagen/Héraucourt: *Englisch-deutsches und deutsch englisches Wörterbuch* 1972.

10) G. Helbig, W. Schenkel: *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*, Leipzig 1978 S. 264～265 参照。

11) H. Brinkmann: *Die deutsche Sprache*, Düsseldorf, 1962. S. 291～292.
J. Erben: *Deutsche Grammatik Ein Abriss*, München, 1972, S. 74.